

コロナ禍3年間の取り組みと
コロナ後の新たな取り組みについて

社会福法人 札幌協働福祉会
児童発達支援センター たくあいアクティビティ「むう(夢)」
北山 竜大

1

はじめに！ 事業所の紹介とあいの里って

児童発達支援センター
たくあいアクティビティ「むう(夢)」
JRあいの里教育大駅から徒歩1分
幼児～高校生までの発達障害及び重症心身障害の子ども達と一緒に
活動等を実施
北区を中心とした「児童発達支援センター」として活動している

あいの里(+南あいの里)
札幌市北区あいの里:札幌市の北東部に位置し、石狩群に近い場所
人口:約24,000人

2

コロナ禍におけるむうでの活動や過ごし

○公園やお散歩等の外出をして子ども達の気分転換や体力向上に
繋げていた
→自分のデイの子ども達以外の人たちの動向や時間帯等には
配慮して行っていた

○室内での遊びの設定もリトミックやトランポリン等の動きの
ある活動を設定することで体力の向上や子ども達のストレス
発散に繋げていた

3

コロナ禍におけるむうでの活動や過ごし

○マスクを付けることが難しい子ども達も多かったため、
子ども達同士やスタッフと子ども達の距離間の配慮や食事
介助の際に感染対策を徹底する等可能な限り周りがフォローを
するようにしていた

○行事が全クラスで出来ない状況が続き、クラス毎の日程や
時間の調整が大変であった。
同時に他クラス同士の子ども達の関わる機会が少なくなっていた

4

コロナ禍におけるむっでの活動や過ごし

～行けないからこそ体験を！！～

コロナ禍で娯楽・社会施設等の現地に行きにくく、実際に体験が出来ない！ ということが多く...

そのため！

室内で出来そうなものは活動として設定し、体験・経験不足の解消にも繋げるように努めていた

“繋がる”事の制限を受けて気づいた
繋がり的重要性

○コロナ禍により直接的に保護者の方と交流やお話する機会が減少し、電話での対応が多くなってしまった

○保護者同士のつながりを持てる機会の提供が少なかった

コロナが落ち着いてきて感じた“繋がり”の大切さ

実際に保護者の方を含めたさまざまな方と顔を合わせてコミュニケーションを取ることが出来るようになって...



相手の声のトーンに加え、相手の反応を見ることができ、相手の気持ちに寄り添いながら対話することが出来るようになった

直接話しをすることの大切さを改めて痛感する

コロナが落ち着いてきて感じ“繋がり”の大切さ

○先日、コロナ流行後、初の保護者参加イベントのバーベキューを開催！

このイベントで...

保護者同士のお話を聞いていると、幼稚園・保育園や学校の情報を共有している様子が見られた

子ども達同士のつながりはあったが、保護者同士の繋がりがなかったためにそこからコミュニティの広がりが見られてきたように感じた

3年間で過ぎて見えてきた課題と
これから取り組んでいきたいこと

◎課題

- 活動への取り組みにおいて体験の機会や経験値の不足が見られる
コロナ禍でもごっこ遊びとして取り組んでいたが、経験不足が体験不足は否めない
- 口もとの動きの重要性
表情変化を読み取れない子ども達が増えてきているように感じる
- スタッフ・保護者それぞれの繋がり(主に対面での)の不足

9

3年間で過ぎて見えてきた課題と
これから取り組んでいきたいこと

◎取り組み

- 今後も感染対策を取りながら、娯楽・社会施設への外出やデイ内で
イベントの開催や模擬体験出来る活動の設定等を実施していく
- 絵カード等を使用して口の動きを見せたり、状況に応じて顔を見せて
表情の変化を見せていくような活動の設定(しっかりとした環境の設
定に配慮していく)

10

3年間で過ぎて見えてきた課題と
これから取り組んでいきたいこと

◎取り組み

- スタッフと保護者、保護者同士がつながりを持てる場を提供し、
コミュニティを広げていく
(イベントの開催や対面での面談の実施等)

11

ご静聴

ありがとうございました

12